

「ずいぶんと大きい頭ですねー。あなたの頭は。その頭にはいったい何が入っているんですか？」

突然、唐突に、誰かが僕に向かって言った。振り返ると見知らぬ日本人がまじめな顔をして僕の頭を見つめながら立っていた。

「えっ？」

□

9月の、まだ蒸し暑さが残るある日、僕は見送りに来てくれた家族や友人達と成田にいた。

フランスに旅立つ日だった。その年僕は大学を卒業し、大学院で研究生として残りながらその日が来るのを待っていた。

就職した者や、修士課程に進学した者、友人たちはそれぞれに自分の目指す人生を歩き始めていた。そんななか、僕はと言えばちょっと気楽で、少しばかり遠回りな人生の選択をし、さほどの大儀もないままに歩き始めようとしていた。そしてその日、思いもかけず大勢の友人たちが見送りにきてくれた嬉しさに、僕はただ胸を熱くしていた。

出国ゲートに向うエスカレーターが静かに少しづつ下がっていく。またひとつ、またひとつと家族や友人たちの顔が消えていった。

竹内まりやの”SEPTEMBER”が遠くから聞こえてきた。

□

「フランスにいらっしゃるんですか？」

「ええ。まあ。」

満席の機内の息苦しさに耐えかねていた頃、隣の女性が声をかけてきてくれた。なんでもパリ経由でポルトガルに留学に行くという。きちんとした話しぶり、丁寧な言葉遣い、そしてその目は夢と希望に満ちて輝いて見えた。

機内食を食べながら彼女と話すうちに急に不安が頭をよぎってきた。

TOURSが目的地だった。でもどうやってパリから行くか何も知らなかったし、またその前に何日かパリで過ごすつもりではいたものの、どこに泊まったらいいのか、なにも考えていなかったことに気づいた。ガイドブックも持っていない。もちろん地図もない。学校の手続きやビザのこと意外、何の準備もしてなかった。

「しまった。」とは思ったけれど、「なんとかなるでしょう。」などと彼女に答えていた。

□

僕たちを乗せた便はパリに着いた。預けた荷物が出てくるのを待っていると、あのポルトガルに行くという女性が声をかけてきた。

「あのう、こちらの方、同じ便に乗っていて、さっきアンカレッジで知り合ったのですけれど、パリには何度もきているんですって。とても詳しいのなりに。それでちょっとご紹介しようかと思って、、、」

隣りを見ると一人の日本人女性が立っていた。きれいな人だった。はっきりとした目鼻立ちの垢抜けた美人だった。僕は少し顔を赤らめながら、

「ああ、どうも。はじめまして、..」

「市内まではバスで？、それともメトロ？ どの辺に泊まるの？」

「いやあ、何にもわからなくて、調べてなかったもんで。バスがあるんですか。へえ、」

「.....」

「あのう、どの辺りに行けば安いホテルがあるんですか？そのバスって、そのお、ホテルがあるような所にも行くんですか？」

「ああ。だめだこりゃ。わかったわ、私も今夜泊まる所を探すから一緒についていらっしやい。いい？」

「ああ。そうですか。それは助かります。すみませんよろしくお願ひしまーす。」と頭をさげた。

ポルトガルに行く彼女は、「よかったわね。」と言わんばかりに笑顔を僕に向けると、乗り継ぎ便に乗るため、「じゃあ、気をつけて」と言って手を振りながら小走りにその場を離れていった。

□

「あのね、この辺はカルチエラタンとって、安くて手ごろなホテルがいっぱいあるのよ。そしてとてもいいところよ。私大好きなの、このあたり。さあ、探しましょうか。今日の”ねぐら”。」と言ってすたすた歩き始める。

「はい。わかりました。」と僕は重たいスーツケースを引きずりながら彼女の後を金魚の糞のようについて行く。

「だめか。」とって彼女は一軒目のホテルから出てきた。

「だんだん時間がたつと部屋はどんどんなくなっていくの。早くみつけないとね。さあ、つぎ行きましょうか。」

二軒目のホテルも満室だった。三軒目も同じだった。9月のパリは混んでいると後になって知った。

疲れていた。手ぶらならまだいい。でも重たいスーツケースが足を引っ張る。

「つぎ、あなたやってみる？もうわかったでしょ、やり方。ね。やってみて。」

「ぼ、ぼくがですか？」

「男でしょ。ほらっ！」

緊張した。汗が吹き出る。「あのう……」と言って一軒のホテルに入ってしまった。

「え、あるんですか？部屋。よかったあ。え？何人？あっ、えーと二人です。えっ？いまいくらって言いました？なにっ？ えっ？ベッドのタイプ？ええと、、何ですかそれ？」

聞いてていた彼女はしびれを切らし、「部屋はシングルで二つ。シャワーだけでいいわ。え？シングルは一部屋しかない？じゃあツインかダブルの部屋は？あるの。じゃあもう一部屋はダブル。シングルとダブルの部屋、一部屋ずつお願い。朝食付きでね。」
あっというまに決まった。

□

「向こうがサンミッシェル。」「あっちはサンジェルマンデプレ。」
「今いるのはメトロのオデオンの駅、こっちに行くとリュクサンブール公園があるのよ。」

こんな風に彼女は僕をあちこち案内してくれた。

最初の晩は安くておいしいと言うビストロに行った。
僕は会話の教科書に載っていたままに、トマトサラダとステーキフリッツを頼んで、それがちゃんとでてくるとご満悦だった。

二日目、彼女は「ちょっと寒くなってきたからと。」と言ってサンジェルマンデプレのブティックでケーブル編みの薄紫のニットを買った。そのやさしい薄紫は彼女によく似合っていた。

三日目、TOURSへの行き方を教えてもらった。

そして四日目。僕はTOURSに行くことになった。

「じゃあね。気をつけてね。だいじょうぶ？ しっかりやるのよ。がんばって。」
メトロの入り口で、「さよなら」の時が来た。

最初言葉が出なかった。しばらくの間黙っていた。ひと呼吸、大きくパリの空気を吸い込むと、ただ一言、「ありがとう。ほんとに」といった。彼女はそのはっきりとした瞳をきらきらさせながら、「じゃあね。」と歩いていった。メトロの入り口にたたずむ僕に一度だけ振り返ると、軽く手を振った。そして日本より早く訪れるパリの秋のなかに見えなくなっていった。

□

TOURSでのホテル探しは容易かった。なんてったってパリで実践していたんだから。学校の手続きは翌日にすることにして、僕は駅前のホテルからTOURSの町に出て行った。パリの喧騒に比べたら、落ち着いた静かなところだった。

旧市街と思われる方向に通じる細い道を歩いていたとき、一人の日本人らしい女性とすれ違った。一瞬目と目が合った。

「こんにちは」と、とっさのことだったけど声をかけてしまった。

「こんにちは。」とそのひとも僕に会釈してくれた。すらっとした体に小さな丸顔の容姿はやさしそうだった。バーバリーチェックのストールがベージュのトレンチの襟からのぞいていた。

僕はなぜかいつになく少し積極的だった。なぜ？　パリで一人の女性に世話になった。その”経験”がなぜかわからないけれど、逆に僕を変えたように思えた。

「いつこちらにきたんですか。」

「今朝ですけど。」

「なーんだ。僕と同じ。僕もさっき着いたばかりなんだ。」

「旅行か何かですか？このへんはきれいなお城がいっぱいあるらしいから、それで？」

「いえ。」

聞くと僕と同じ学校に行くと言う。

「なんだ。そうなの。おんなじか。」

「ねえ。お昼食べない？ここであったのも何かの縁だしさあ。」

はじめてあった女性を食事に誘うなんて、日本にいたときは考えられなかったことだ。何かが変わった。そう僕は感じていた。

腹がすいていた。知らない土地だから適当なレストランを近くに見つけ、僕たちは席に着いた。店は空いていた。

「ねえ、なんにする？」

「ううん、なににしようかな。」

「これがいいんじゃない？」とメニューを指差し、まるで手慣れたもののようにリードする。心の中で笑ってしまった。つい数日前にはパリでおろおろして、何もできなかった僕。

彼女と話してわかったこと。僕と同じ年。出身は東京。私立A大の仏文を今年卒業した。学生時代バイトで僕と同じ中学の子の家庭教師をしていた。フランスには一年ぐらいいるらしい。

僕はしごく饒舌になっていた。ダジャレまで飛び出した。

彼女も笑ってくれた。楽しかった。あのパリのひとが見たら驚くに違いない。

そう言えばあのひとはちょっと年上だった。

昼食後、僕たちは町を散策した。カフェでコーヒーも飲んだ。いつしか日が暮れかかっていた。

「夕飯どうする？」

「そうね。何か一緒に食べようか。」僕たちはもうくだけた口をきくようになっていた。

翌日学校で会うことを約束して僕は彼女をホテルまで送って行った。僕と同じように駅に近いホテルだった。

ホテルに戻りベットに入ると僕はあっというまに深い眠りについた。

□

「ずいぶんと大きい頭ですねー。あなたの頭は。その頭にはいったい何が入っているんですか？」

翌朝、地図を頼りに学校に行き入学の手続きのため窓口にいると、突然後ろからこう声がかかった。

「えっ？」 振り返ると、少し小太りで、メガネをかけた僕よりも十歳ぐらい上と思われる日本人だった。サファリジャケットにこげ茶のショルダーバックをさげていた。

とっさに僕は「空気です。」と答えてしまった。何でそんなことを言ったのか自分でもわからなかったけれど、あまりに唐突に言われたものだからついそう言ってしまったのだ。

「空気ですか。なるほど。相当入るでしょうね。その大きさなら。」

なにやつ？

学校に来ると果たして多くの日本人が来ていた。彼もそのひとりのようだった。

「あとう。すみません。あなたは……」

聞くと日本の大新聞の記者でパリ支局に赴任することになり、そのまえにここ TOURS でフランス語を勉強しに来たと言う。外語大ではフランス語が専攻だったらしい。

考えてみると日本を出てから初めて話す”男”だった。それがよりによっていきなり「あなたのその大きな頭に……」とは。

まこと外国に来るとはおかしなことがあるものだと、僕は嬉しくもあり、また奇妙な気分浸った。

そしてこの新聞社の清川さんとは以来ひどく親しくなった。

彼はいつも僕のことを”GROSSE TETE”と呼んだ。

昨日の〇子さんはどこかなと探していると、校舎の入り口に彼女の姿がみえた。その笑顔を見て僕は”大きな頭”のことを忘れようとしていた。

その日、クラスわけの試験が行われ、僕は彼女と同じクラスになった。

「やったね。」とひとりほくそえんだ

□

下宿先を探すのが先決だった。学校が紹介してくれたリストをみながら一軒ずつ訪ねることにした。

一軒目、おばあさんの一人住まいの薄暗い家は、まるで幽霊屋敷のようでパス。

二軒目は「お風呂は週に一回、電話は鍵がかけてあるから使うときは電話代を払って許可を得るように、スタンドの明かりをつけたときは電気代がもったいないから必ず部屋の照明は消すように。」とやたら小うるさいのでこれまたパス。

三軒目、威勢のいいマダムと見るからにオテンバな娘と、ちょっと歯の抜けた元気なばあさんの女所帯。アメリカとドイツの男子学生、ブロンドのスウェーデンの女の子が今下宿

していると言う。ここも風呂は週一回。後でわかったことだけどほとんどの下宿がこの条件だった。なんだかめんどくさくなってきたのと、ブロンドに魅かれてここに決めてしまった。学校までは歩いて二十分の距離だった。

学校は楽しかった。授業よりあの○子ちゃんといられるのが何より嬉しかった。そう、僕はわずかの間に彼女に恋してしまった。

□

一週間が過ぎた。僕はいつものように歩いて下宿に戻った。○子はカトリックの修道院が運営しているFOYERに入っていた。門限が厳しくあまり遅くまで外出できない。その日も日は傾きかかってはいたけれどまだそんなに遅い時間ではなかった。

家の扉を空けると歯の抜けた下宿のばあさんが部屋から飛び出してきた。

「***、日本から電報が来てるわよ！」と大きな声で僕の名を叫んだ。嫌な予感がした。送り主をみると父からのものだった。

『祖父 死す。すぐ帰れ』

一瞬頭が白くなった。祖父は数年前から寝たきりだった。僕は長男だったこともあり子供の頃から孫の僕をかわいがってくれた。今は寝たきりで言葉も話せなかった。日本を出発する日の朝、僕は祖父の枕元で「行ってくるよ。おじいちゃん」と話しかけた。祖父はなにも話せなかったが、その目は優しく僕を見送ってくれていた。

「どうしよう」「とにかく帰らなきゃ。」僕はまず何から始めればよいかわからなかった。慌てていた。そして何を思ったか僕は電報を手にとると、○子のいるFOYERに走った。呼び鈴を押すと修道女が怪訝な顔で僕を迎えた。「急用なので○子さんをお呼びいただけないでしょうか。」と頼んだ。数分たって○子が奥から出てきた。

「どうしたの？」

僕は事のあらましを話した。それを聞いていた○子は少しの間考え込むようにしてから言った。

「私の父の知り合いがパリで旅行会社にいるの。その人に頼めば飛行機の手配とか相談に乗ってもらえるかもしれない。ちょっと待ってて。」と言うと電話をかけに走って行った。

「連絡ついたわ。とにかく一番早く日本に帰れる便探してくれるって言ってるから、すぐにパリに行って。早くパスポートや荷物とってらっしゃい。私も今一緒に行くから。」

「わかった。ありがとう。」と言うと僕は○子と下宿に戻り、貴重品と身の回りのものだけをバックに詰め込み下宿を後にした。駅には言葉どおり○子も来てくれた。

「大丈夫？ はい、これパリの旅行社の人の連絡先。急なことだから飛行機、正規料金になっちゃうって。お金ある？」

「ああ、日本から持ってきたトラベラーズチェック、まだ銀行に入れてないからこれで間に合うと思う。」 滞在許可証取得のために必要な僕の全財産だった。

「そう。じゃあ気をつけてね。その旅行会社、オペラ座のそばだって。今晚は遅くまでいるから心配しないでって言ってたわ。」

「わかった。本当にありがとう。葬式が終わったらすぐ戻ってくるから……」

そこまで言いかけたとき、パリ行きの特急にサンピエール・デ・コールで接続する二両編成の列車が動き出そうとしていた。

僕は手を振った。彼女も見えなくなるまで僕に手を振ってくれた。

□

駅を出ると僕は走った。先のほうに人だかりが見えた。祖父の葬儀だった。

「***が帰ってきたぞ。」と親戚のおじさんが叫んだ。

僕は祖父の葬式にぎりぎり間に合ったのだ。パリの旅行会社の人からフランクフルトからの便を抑えていてくれた。それが最も早く日本に帰れるヨーロッパからの便だったらしい。でもいくら思い出そうとしても、どうやってパリからフランクフルトまで行ったかまるで覚えていなかった。用意してあったトラベラーチェックのほとんどが日本までのチケット代に消えた。でも僕はかわいがってくれた祖父を弔うことができた。

涙も乾かぬうち、僕はTOURSに”帰ら”なければならなかった。使ってしまったトラベラーズチェックの分は父が工面してくれた。格安のチケットをとり僕はフランスに”帰った”。

□

パリのオステルリッツ駅のプラットフォームで一人の日本人の紳士が声をかけてきた。

「日本の方ですね。TOURSに行くには、この列車でいいんですよ。」その”TOURS”の発音が英語的だった。

「はい。この列車で間違いありません。僕もTOURSに行きますから。」

「学生さん？」

僕の荷物の少なさを見て旅行者だとは思わなかったようだ。

「はい。」と答えるとその紳士は、

「へえ。TOURSにも日本人の学生がいるんですね。」と言うと僕をじっと見つめた。

「はい。大学もありますし、付属のフランス語学校があるので、日本人は大勢います。僕はまだ来たばかりですが。」と僕は答えた。

「お仕事ですか？」と僕が聞くと、

その紳士は「ちょっと学会が会ってね。それでTOURSに行くんです。」と言った。

出発の時間が迫っていた。僕は二等車の車両に向いかけた時、その紳士に言った。

「ではこれで。あっ、それからこの列車はTOURSの駅まで直接は行きませんから注意してください。TOURSの駅は引込み線にあって、幹線上のサンピエール・デ・クールという駅で降りてください。そしてそこから小さな編成の列車に乗り換えてください。でもそこから数分ぐらいですぐTOURSに着きますから。」

その紳士は「ご親切にありがとう。」と言って、一等車両に歩いて行った。

僕はどこかで見たことがある人だなあと思いながらも、列車に乗るとそのことはすぐに忘れてしまった。

早く会いたかった。そしてお礼が言いたかった。〇子に。僕にとってそれが何よりも大事で、何よりも今考えていたいことだった。

TOURSの駅は行き止まり駅で、パリの駅に比べればこじんまりとはしていても、その姿は古風で品の良いものだった。

TOURSの駅に着くと先ほどの紳士が僕の数歩前を歩いていた。大きなスーツケースを持っていたためか自分の腕時計より駅舎の大時計を見るために振り返った彼が、すぐ後ろを歩いていた僕に気づいた。

「ああ。またお会いしましたね。さっきは乗り換えのこと、教えていただいて助かりました。本当にありがとう。」

「いえ。」僕は早くその場を去りたかった。

「ホテルは町の中心から少し離れているようなので、これからタクシーに乗ります。よかったら一緒に乗っていかれませんか。おうちまでお送りしますから。」

とりあえず早く下宿先に戻り、すぐにでも学校かFOYERに行って〇子を探そうと思っていた僕は、その紳士の提案に無条件に甘えることにした。そして「ありがとうございます。よろしいんですか。」と言って、その紳士の後にタクシーに乗り込んだ。

タクシーの運転手が彼の荷をトランクに乗せようとしたとき、そのスーツケースにはアメリカの都市の空港のタグが付けられているのが見えた。

僕の下宿先の前でタクシーが止まると、彼が言った。

「今日はありがとう。ところで私は今晚は何も予定がありません。よかったら一緒に食事でもしませんか？ なにか御用があれば別ですが。」

僕はクルマの中で彼の顔をあらためてじっと見ていた。そしてタクシーが止まるほんの少し前にその”顔”を思い出していた。

『そうだ。間違いない。この人は、ええと、なんて名前だっけ、ほらほらノーベル賞もらったあの人、ええと、ええと、何賞だったけ、ええと、そうだ〇〇さんだ。思い出したぞ。〇〇さんに違いない。』

僕は著名なノーベル賞受賞者の先生から食事に誘われた。
でも心のなかは○子でいっぱいだった。いくら○○先生に誘われても、僕は○子に一分一秒でも早く会ってお礼が言いたい、それだけだった。

「ありがとうございます。お誘いいただきまして。でも今日はどうしてもことわれない大事な約束があるんです。本当にすみません。」そう言うとその高名な学者は、「いいんですよ。こちらこそ。急にお誘いしてしまって。それではね。どうかこちらでしっかり勉強してくださいね。そしてくれぐれもお体を大切にね。」そう言うやさしい笑顔を残しタクシーで去って行った。

僕は大急ぎで下宿のマダムやばあちゃんに挨拶もそこそこに部屋に入ると、バックのなかから○子へのお礼のみやげを引っ張り出し、そして飛び出すように外に出た。そして、走った。走った。

○子は学校にはいなかった。○子のいるFOYERは学校のすぐ向い側にあった。呼び鈴を鳴らし修道女が彼女を呼びに行った。ものすごく長い時間を感じられた。

○子が出てきた。

「あっ、帰ってきたの、帰ってきたんだ。帰ってきたんだね。おじいさまの葬儀には間にあった？..それで.....」

僕にはその後の言葉は聞こえなかった。

そして僕は何も言えなかった。

ただ涙だけがぽろぽろと流れた。

□

翌日学校に行くと、清川さんに会った。

「聞きましたよ、大変だったね。来た早々。でも元気な姿を見て安心しましたよ。」とやさしく声をかけてくれた。

「いえ。ご心配をかけまして。」と答えると、

「○子ちゃんも心配してましたよ。」と言った。

ちょっと照れくさかったこともあり話題を変えようと、

「そう言えば、清川さん、昨日帰ってくるとき、ほらノーベル賞とった○○さんに会いましたよ。」と昨日の話をかいつまんで話した。

すると、新聞記者である清川さんは驚いた顔をして、

「なんで、食事断ったの。こんなことめったにありませんよ。○○さんと二人で食事するなんて。ああもったいない。何の用があったの。きのう。こんな食事を断る以上に大事なことなんてそうはありませんよ。まったく。ああ ああ もったいない。」とまるで自分のことのように悔しがった。

「そんなものかな。」と思いながら、本当の理由を言えない僕はただただ清川さんが悔しがる姿を見ていた。

□

このノーベル賞の〇〇先生が、このフランスの小さな田舎町に来て、そして僕がノーベル賞の先生の食事の誘いを断った”事件”は、またたくまにこの小さな町の”日本人会”に広まった。

僕はタクシーで送ってくださっこと、そして食事に誘って頂いた事だけはもう一度きちんとノーベル賞の先生に礼状でもだそうかと思った。

あの時は本当に急いでいたので、ちゃんときちんとお礼を言うのを忘れていました、とでもいった調子で。

**すべてフィクションです。登場人物等仮に似たものがあってもそれは全くの偶然に過ぎません。*